

モラロジー研究所（旧称）に奉職十年の歩み

所 功

昭和十六年（一九四一）十二月生まれの私は、平成二十四年（二〇一二）春、京都産業大学を定年退職しモラロジー研究所（現在モラロジー道德教育財団）へ奉職した。爾来十年近く、幸い健康に恵まれ関係各位に助けられながら、専任・客員としての仕事を続けてきた。

この令和三年（二〇二一）十二月、満80歳となる機会に、『わが八十年の歩み』と題する年譜略注の覚書を作成した。その内容は、大別して左の四期から成る。

I期 西美濃と名古屋における修学期

※昭和十六年十二月出生、同四十一年三月院修了、24年強

II期 皇學館と文部省における研鑽期

※昭和四十一年四月就職、昭和五十六年三月退官、15年間

III期 京都産業大学を中心にした活動期

※昭和五十六年四月転職、平成二十四年三月退職、31年間

IV期 モラロジー研究所における奉仕期

※平成二十四年四月就任、令和三年十二月在任、10年間

そのうち、最後の「奉仕期」部分を、ここに掲載して頂く。簡略を旨とし、また個人情報にできるだけ配慮したが、記録も記憶も不備なため、重要なこと書き漏しや思いがけない誤記が少なくないことであろう。これらの点を、あらかじめお断りすると共に、大小となくご批正を賜りたい。

なお、I～IVの全文は、私のHP (tokoroisao.jp) に十二月十二日付で掲載し、後日、『未刊論考デジタル集成』DVD-R O M版の最後に補訂し再録することを予定している。

凡 例

- 一 記事は、原則として年月(日)順に簡潔な綱文を記し、そのうち主な事項を※の部分で少し詳しく説明する。
- 二 年齢は、自分も他者も、誕生の年を1歳とする数え年ではなく、たとえば満80歳は誕生日前も正月から80歳と示す。

平成二十四年(二〇二二) 71歳

・三月末日で京都産業大学を定年退職する。この機会に『歴史研究』連載の「古希随想」を出版する。

※京都産業大学を定年退職：昭和五十六年(40歳)春から通計三十一年間勤続した京都産業大学を、定年退職した。その際、『産大法学』で退職記念の特集号を出して下さり、また大学から「名誉教授」の称を授けられた。

※『歴史研究』：新人物往来社で月刊『歴史読本』編集長を長らく務めてきた吉成勇氏が、歴史愛好者のために会員制の月刊『歴史研究』の主幹を長らく続けてきた。

ただ令和三年(二〇二二)五月、同氏(80歳)の他界により、同誌の編集は別の出版社へ移管されることになった。

※『古希随想―歴史と共に七十年―』：この吉成氏とは昭和

五十年代から親交を重ねてきた。その誼みで『歴史研究』に昨春から九回「古希随想」を連載し、それをまとめて略年譜などを加え、定年退職記念として自費出版し、お世話になってきた知友などに差し上げた。

・四月初めから小田原市に移住し、モラロジー研究所の教授に就任する。

※小田原市に移住：定年を機に郷里で晩年を暮らしたいと考えていた。そのためにも、生まれ育ったふるさとに役立てばと思い、『野中の歩みと社寺の営み』を纏め、隣家の若い草野靖彦氏に力してもらい、全戸(七十五軒)に差し上げた。

しかし、自動車を運転できない私は、免許を返納する妻と共に、西濃の山里で生活していくことが難しい。それを察した小田原市に住む娘夫婦が、すぐ隣の分譲地を求め、小さい新家屋を準備してくれたので、「老いては子に従う」ことになった。

ここは、JR国府津駅の近くで、前に太平洋が広がり、後ろに富士山を仰ぐことのできる快適な住処である。

※モラロジー研究所の教授：定年後も可能な限り研究を続けたいと思っていたところ、数年前から京産大の研究会に参

加していた橋本富太郎氏の勤めているモラロジー研究所の廣池幹堂理事長から招請され、専任の教授（研究主幹）として着任することになった（ただ既に同二十一年度から研究所の客員として、講演会や研究会に出講していた）。

専任の間、毎週三日か四日、東海道線と常磐線を乗り継ぎ、南柏の研究所へ通った（往復四時間半余り）。併せて廣池学園の麗澤大学客員教授にも任じられ、全国各地への出講に多忙を極めた。（令和二年度からは客員となつて、原則出勤せず、研究会・会議にはオンラインで参加。）

また京都産業大学では、文化学部のリレー講義「京都の伝統文化」などを担当し、日本文化研究所の客員研究員として研究会に可能な限り参加してきた。

さらに皇學館大学では、特別招聘教授として不定期の企画講義や研究会に出てきた。

・六月に論文集『皇室典範と女性宮家』を出版する。

・七月五日「皇室制度に関する有識者会議」のヒアリングに招かれ管見を公述する。

※『皇室典範と女性宮家』を出版：平成十九年（二〇〇七）

六月まで十年余り侍従長を務めた渡辺允氏は、その三年後に出版された『天皇家の執事』（文藝春秋）を、二年後の

同二十三年（二〇一一）十二月、文庫版化した。その後書き「皇室の将来を考える」の中で、次のように訴えておられることを知り驚いた。

「天皇陛下は、十年以上にわたつて、この（皇位継承をめぐる）問題で深刻に悩み続けられました。……そのお悩みによつて、陛下は夜お寝みになれないこともありました……現在、それとは別の問題として、急いで検討しなければならぬ問題があります……。内親王さまが結婚されても、新しい宮家を立てて皇室に残られることが可能になるように、皇室典範の手直しをする必要がある……。これは一日も早く解決すべき話題ではないでしょうか」

これは当時まだ「宮内庁参与」（天皇陛下の相談役）の渡辺允氏（75歳）が、天皇陛下（78歳）の御内意を汲んで代弁されたものと直感した。

それは私も十数年前から痛感していたことであるから、直ちに関係拙稿を集成して、『皇室典範と女性宮家』（勉強出版）を刊行したのである。

※「皇室制度に関する有識者会議」のヒアリング：当時の宮内庁長官羽田信吾氏（70歳）は、渡辺允参与に近い意向を、同二十三年九月に首相となつた野田佳彦氏（55歳）に伝えた。

すると野田首相も、これを「緊急の課題」と受けとめ、直ちに「皇室典範改正準備室」を再編成して「皇室制度に關する有識者会議」を立ち上げた。そこで七年前と同じく「学識者ヒアリング」が二月二十九日から六回行われて、最後の七月五日、私も管見を公述した（その全容は現在も官邸ホームページに掲載されている）。

平成二十五年（二〇一三） 72歳

・五月一日、出雲大社の「大遷宮」を奉拝する。
また十月二日、伊勢神宮の第六十二回式年遷宮（内宮遷御の儀）を奉拝する。

※出雲大社の「大遷宮」を奉拝：出雲大社の本殿は、「国譲り」の記紀神話によれば、大和朝廷の宮殿に似せて造られたと伝えられる。この大社では、伊勢のような式年（一定の年数）と異なり、必要に応じて修理を加える遷宮が繰り返されてきた。それが今回、昭和二十八年（一九五三）から六十年ぶりの大修理による「大遷宮」として行われた。

その主要な実景などをモノクロ撮影して来られた著名な写真家増浦行仁氏の仲介により「大阪盛和塾」（稲盛和夫京セラ会長の教えを学ぶ会）代表の畠山兼一郎氏から勧め

られ、大遷宮祭を本殿脇で奉拝させて頂いた。

しかも今年は、伊勢の神宮で二十年ごとの第六十二回式年遷宮が行われた。それに先立つ「お白石持」行事には、八月四日、モラロジー研究所の奉仕団グループとして、娘婿もその両親（柏市在住）も一緒に参加できた。

なお、この機会に『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』（モラロジー研究所ブックレット）を書き上げた。

そして十月二日の内宮遷御は、神宮評議員とし奉拝させて頂いた。そこに「キーン・ドナルド」（鬼怒鳴門）先生（91歳）も、「今回は日本人となつてから初めてのお詣り」に来られた。

・六月二十五日、青森県三沢の航空自衛隊基地で教養講演に出張する途中、宮城県石巻市の大震災遺蹟を訪ねる。

※一昨年の東日本大震災には何もできなかったが、せめて現地で実情の一端を知りたいと思い、地元のモラロジアンに大川小学校など数ヶ所を案内して頂いた。

平成二十六年（二〇一四） 73歳

・正月早々、編著『日本年号史大事典』を出版する。

※編著『日本年号史大事典』：昭和五十二年（一九七七）に『日本の年号』を出した時の雄山閣芳賀章内編集長から、いずれ総合的な年号（元号）の大事典を作ってほしいといわれていた。

そこで、五年前に『皇室事典』を共編した後、その編集実務を手伝った橋本富太郎氏と、京都の研究会で親交のあった久禮日雄・五島邦治・吉野健一の三氏に分担執筆を頼み、予期以上に充実したものを仕上げる事ができた。

しかも、今上陛下の高齡譲位の予定時期が確定した平成三十年に『元号―年号を読み解く日本史―』（文春新書）および「令和」改元直後に『元号読本』（創元社）を、久禮・吉野両氏との共著で出版した。

・六月早々、宮内庁編『昭和天皇実録』が完成して、八月二十一日、天皇・皇后両陛下に奉呈されたが、それまでに、その全容データを通覧して各紙に所感を述べる。

※宮内庁編『昭和天皇実録』：昭和天皇の御生涯（明治三十四年（一九〇一）～昭和六十四年（一九八九））を正確な史資料に基く編年体の実録編纂は、平成二年（一九九〇）から宮内庁書陵部によって進められ、二十五年足らずで仕上げられた。

その全容は、六十一冊一万二〇〇〇頁余にのぼるが、両陛下への奉呈に先立ち、報道準備のため、PDFとして各社に内々に渡された。それを私も数社の宮内記者たちから送られ、二ヶ月少々で通読して、各社内の検討会に参加し所見を求められた。

これを機に不得意なパソコンだけでなく、手軽なタブレットも使い、情報検索などをしやすくなった。

※『昭和天皇の大御歌』を出版：この『実録』所収の御製（和歌）を関係記事と共に抄出して、月刊の『歴史研究』に連載した。

その連載を終えて、平成三十年（二〇一八）早々、月刊誌『短歌』などを出している角川書店の編集者O氏に相談したところ、快く引き受けられたので、翌年の御代替りまでに完成の準備をしていた。

すると不思議なことに、同三十年秋すぎ、朝日新聞社の宮内記者Nさんが、「昭和天皇ご自筆の歌稿メモらしいものを、長らく陛下に近侍された方（内舎人M氏）から託されたので、調査解読に協力してほしい」と頼まれ、年末までそれに没頭した。

その内容は、昭和六十年（85歳）十月から同六十三年八月までの御歌の下書きであり、既発表の御歌八七二首中に入っていない分が二二八首も含まれていることを確認し

た。その一部分は朝日新聞のスクープとして元旦一面と七日特集に紹介された。

しかし、その全歌稿を早く世に出す必要があると考え、進行中の編著『昭和天皇の大御歌』に「補章」として収録させて頂いた（その後、このメモは学習院大学の史料館に寄贈されている）。

・七月十四日、京都産業大学で「後桜町天皇二百年祭記念シンポジウム」を開催する。

※後桜町天皇二百年祭シンポジウム：かねて同女帝の宸筆御記を解読してきた「日本文化研究所」の主催で「女帝の歴史と文学」に関する研究報告と相互討論を実施した（宍戸忠男・橋本富太郎・藤本孝一・盛田帝子・飯塚ひろみおよび小林一彦・若松正志の七氏と私）。

尚、そこへ来聴された宮内庁書陵部編修課長の詫間直樹氏を介して、数年前から後桜町天皇の詳細な年譜を作成していた妻の京子に、十二月二十四日の二百年式年祭に先立ち、女性の研究者として、女帝の御事績を、天皇皇后両陛下と皇太子同妃両殿下に御進講するよう御依頼を承った。そこで、半年近く準備して、吹上の御所で名譽な大役を果たせるようサポートに努めた。

・十月下旬、「大切なことを学ぶ会」の向井征会長に勧められ、済州島を歴訪する。

※「大切なことを学ぶ会」：和歌山（紀の川市）の向井征氏（昭和十二年〜平成二十九年）の有志勉学会。同氏は、日本学協会の主催で長らく行われてきた五月の楠公祭（大阪の住吉大社）と十一月の崎門祭（京都の八坂神社）に数年前から家族づれで参列されるのみならず、地元でも有志の月例勉強会を励行してこられた。その年次総会で一般公開の講演会への出講を求められ、同氏が癌により急逝されるまで参上した。

※済州島歴訪：向井氏は若いころ日本青年会議所やロータリークラブなどで積極的な活動を続け、日韓友好にも努めてこられた。とくに済州島の外国人名譽市民第一号に選ばれており、今秋同島を親善訪問する際に同行を強く勧められた。

私の役目は十月二十一日、済州スカウト会館で日本文化について基調講演することであったが、その前後に同島文化財委員などの案内で「三賢殿」「三姓穴」や道立済州高校と国立済州中学校、主要な観光地を案内して頂いた。

平成二十七年（二〇一五） 74歳

・八月上旬、熊本の菊池神社などを歴訪する。

※菊池神社など：熊本県モラロジー協議会主催の教育者講演会に出講前後、妻（旧姓菊池）と共に、まず菊池武時を祀る菊池神社、ついで加藤清正を祀る加藤神社、さらに翌日、萩市立博物館と松陰神社の至誠館および松陰の生家などを訪ねた。

・八月末日、NHKテレビ大河ドラマ『花燃ゆ』にちなみ、編著『松陰から妹達への遺訓』を出版する。

※『松陰から妹達への遺訓』を出版：大河ドラマ『花燃ゆ』（脚本、大島里美さんなど女性四名）は、吉田松陰の妹（文、出演井上真央さん）をヒロインとして幕末維新の家族関係を描き出した。

かねて松陰とその家族に関心のあった私は、この機会に松陰の全集を読み直して気付いたことがある。松陰には兄と弟および三人の妹があり、年齢の近い兄の杉梅太郎と長妹の千代にあてた手紙が多い。その千代の長男庫三氏（慶応三年（一八六七）〜大正十一年（一九二二））が、のち

に吉田家を継ぎ、松陰五十年祭の明治四十二年（一九〇九）、遺稿『松陰先生女訓』などを編刊している。

そこで、これも取り入れながら、松陰から妹達（特に千代）あての書翰を判り易くし、萩の松陰神社（上田俊成宮司）や吉田基子さん（庫三氏孫）などより提供された直筆写真などを入れて、勉強出版から刊行した。

・十月五日、賀茂別雷神社で式年遷御の儀をインターネット中継する企画に参加する。

※賀茂別雷神社の式年遷御：洛北の「神山」に降臨されたという「賀茂別雷大神」を祀る上賀茂神社では、その祖神「賀茂御祖大神」を祀る下鴨神社と共に、本来「二十一年」ごとであった遷宮を、中世から数十年ごとに行ってきた。それが昭和四十八年（一九七三）から「二十一年」の式年に復元され、次の平成六年（一九九四）について、この年（二〇一五）第四十二回の正遷宮が行われた。

その遷御の儀は、伊勢や出雲などと同じく浄闇の夜分に斎行され、特別に招かれた人々しか奉拜できない。しかし今回は、神社の特別な配慮により「平成プロジェクト」の企画でインターネット中継される解説を頼まれた。

とはいえ、厳粛な神事であるから、言葉を慎み声を抑え

て、司会のWさんからの問いに答える形で三時間の本番を務めた（その要約が翌日KBS京都で放映されている）。

平成二十八年（二〇一六） 75歳

・四月下旬・五月上旬、阿波と土佐の土御門天皇遺跡を歴訪。

※土御門上皇遺蹟歴訪：承久の変に敗れて、後鳥羽上皇が流された隠岐は昭和六十年、また順徳上皇が流された佐渡には平成四年遺蹟を歴訪した。

さらに今年、政変に直接関与されなくても父帝と弟君に心を寄せた土御門上皇が遷られた土佐と阿波の遺蹟を歴訪することができた。共にモラロジー研究所の研修会に出講するため、四月二十三日前後に、徳島へ、また五月八日前後、高知へ参上し、関係者に詳しく案内して頂いた。

・九月十日から洛南で「近世京都の宮廷文化」展覧会を開催する。

※「近世京都の宮廷文化」展覧会：昨年は大正四年（一九一五）の大札から満百五十年の節目をとらえて、それが東京でなく京都で行われた意義を広く再認識してもらうため、

その記念展覧会を考え、京都の有志に相談した。すると平成二年（一九九〇）十月の即位礼NHK特番で解説を一緒に手伝った井筒與兵衛氏の後継主が、全面的に協力を約束され「井筒企画」の山本信之社長と協議して構想を具体化した。

すなわち、計画を三期（三年）に分けて、まず本年の九月・十月には洛南の京セラ美術館と城南宮（鳥羽重宏宮司）の齋館を会場にして「近世京都の宮廷文化」展覧会を開く。光雲寺（田中寛洲禅師）からの特別出品、伝統文化保存協会（今井賢参与）・NPO法人「都草」（坂本孝志代表）などの特別な協力もえた。

ついで来年の九月から翌年一月まで、東京の明治神宮文化館を会場にして「近代御大札と宮廷文化」展覧会を催す。さらに再来年の八月と九月には洛東の細見美術館と京都市美術館別館（もと大正饗宴場）の両会場で「京都の御大札」特別展覧会を開催することになったのである。

この三年間に多くの方々から様々の協力をえて、大札の持つ文化的な意義を学ぶことができた。

・八月八日、天皇陛下（83歳）が「讓位」のご意向を表明される。それに応じて政府の設けた有識者会議の第一次ヒアリング（十一月七日）で管見を公述する。

※天皇陛下が「譲位」のご意向を表明：今上陛下は既に平成二十四年（二〇一二）七月の宮内庁参与会議において、翌年十二月の満80歳ごろまでに「譲位」したいご意向と理由を示されたという。

しかし、それに政府が耳を傾けないまま四年も推移したところ、本年八月八日、陛下（83歳）みずから「象徴天皇のお務め」についてのご説明とそれを若い世代に受け継いでほしい、というご意向を穩かに表明された。

当日、それをNHKの特別番組に出て拝聴し、共鳴の所感を述べた。すると、直後にベスト新書の編集者から「象徴天皇『高齢譲位』の真相」について執筆を頼まれ、大急ぎで書き上げた。

さらに、ご意向に応じて政府の設けた「天皇の公務負担軽減等（実は「退位」の是非）に関する有識者会議」が設けられた（座長今井敬経団連名誉会長、座長代理御厨貴東大名誉教授、他に委員四名）。そこで開かれた「学識者ヒアリング」に招かれ、十一月七日管見を述べた。

・十一月中旬、九州出講に続いて対馬を歴訪する。

※対馬歴訪：十一日、福岡モラロジー女性クラブで「吉田松陰の家庭教育論」について講演の後、十二日から数日、対

馬を訪ねた。対馬藩主子孫の宗中正氏（モラロジー研究所教授）が毎年この時期に営まれる小茂田浜神社（蒙古襲来で戦死した守護代宗助国などを祀る）の慰霊祭に列席されると聞き、随行させて頂いたのである。

その前後に郷土史に詳しい方々の案内で、宗家の菩提寺万松院をはじめ対馬市歴史民俗資料館、住吉ツツノオ大神ゆかりの豆酸（つつ）の天道法師墓塔、および豊玉町の和多都美神社岩倉、上対馬町の日露戦争ロシア将兵慰霊碑から和珥津（神功皇后出航伝承地）などを巡ることができた。

・十二月十一日～十四日、三度目の皇居勤労奉仕に参加する。

※三度目の皇居勤労奉仕：三泊四日の皇居勤労奉仕は、満75歳までしか申し込めない。そこで大阪・京都などの有志六十名（団長辻田光司氏・副団長野崎真夫氏）奉仕団「日本文化に学ぶ会」の顧問として参加し、幸い天皇・皇后両陛下と皇太子殿下から御会釈を賜わり、御三方から思いがけない御言葉を賜って恐縮した。

平成二十九年（二〇一七） 76歳

・年初から二百年前に譲位された光格天皇関係の絵図集成を作るための準備に取り組む。

※光格天皇関係の絵図集成を作る：今上陛下が数年前から調べられたと伝えられている光格天皇が、文化十四年（一八一七）譲位された時の『桜町殿行幸図』（彩色）を、国立公文書館公開のデジタルアーカイブで知った。

そこで、光格天皇の元服から上皇としての修学院御幸に至る多彩な絵図と主要な宸筆を精査し、各々に解説を加えて出版する準備を始めた。それには橋本富太郎・久禮且雄・吉野健一・後藤真生の四氏らの協力をえた。しかし相当に手間取り、A4判三九〇頁の大冊を国書刊行会から出せたのは、令和二年三月である（全額自費負担）。

平成三十年（二〇一八） 77歳

・二月中旬、大正天皇の大嘗祭ゆかりの香川県綾川町と徳島県美馬市を訪ねる。

※香川県綾川町：大正四年（一九一五）の大嘗祭には、悠紀

地方として愛知県岡崎市六ツ美地区、主基地方として香川県綾歌郡綾川地区が選ばれ奉仕した。その遺蹟が大切に保存され資料館まで作られている。そこで、前者は平成二十七年六月「お田植祭」を見学し、このたび「建国記念の日」奉祝大会に出講の後、後者の遺蹟と資料館を見学して、両方とも関係者の御努力に感服した。

※徳島県美馬市：ついで二月十二日、徳島県美馬市出身の日本画家藤島博文氏の依頼により、同市の「NPO法人あらたえ」主催の会で「阿波忌部の荒妙貢進」について講演した後、阿波忌部の後裔で大正大嘗祭に荒妙貢進を数百年ぶりに復活された三木家の当主信夫氏（木屋平貢）を訪ね、貴重な史資料を見せて頂いた。

・六月二十八日、大覚寺の研修会で「弘仁戊戌御写経」について講述する。

※「弘仁戊戌御写経」：嵯峨天皇が譲位後に離宮に創建された大覚寺には、弘仁九年戊戌（八一八）に書写された宸筆「般若心経」が「心経殿」に宝蔵されている。それが六十年ごとに特別開封され、満千二百年目の今年その式年にあたり十月一日から拝観できる。それに先立ち、大覚寺奉賛関係者の研修会において「嵯峨天皇『弘仁戊戌御写経』の

歴史的意義」につき講述した。

十一月二十一日、その特別開封を拝観し、宝物館で後奈良天皇から光格天皇に至る五方の宸筆「般若心経」も拝観することができた。

・九月『近代大礼関係の基本史料集成』を、また十二月『五箇条の御誓文』関係資料集成』を出版する。

※『近代大礼関係の基本史料集成』：来年の御代替りに先立ち、明治・大正・昭和の大礼（御即位・大嘗祭・大饗および改元など）に関する基本的な史料（平成の初めころから翻刻・解説したものが多し）を集成して国書刊行会から出版した（A5判六八二頁）。

※『五箇条の御誓文』関係資料集成』：今年は慶応四年（明治元年（一八六八）三月十四日に「五箇条の御誓文」が出版されてから満五十年にあたる。そこで、これまで発掘し紹介してきた関係資料を集成して写真も多数加え、原書房の「明治百年史叢書」の一冊として出版した（A5判二五二頁）。本書の原稿入力などは、後藤真生氏（京都産業大学卒、モラロジー研究所研究助手）が担当した。

・八月上旬、家族で福島などを訪ねる。

※福島歴訪：娘夫妻の発案により車で一泊二日の旅をした。

まず妻の先祖の出身地である福島県棚倉町の蓮家寺（江戸初期に蓮池主水と糟家弥兵衛が創建）で墓参の後、磐梯山の麓に泊り、翌朝「野口英世記念館」などを見学した。

ちなみに、娘と婿は、私の生家（野中）にも毎年お盆参りなどを続けてくれている。

・十二月一日、京都の岡崎神社で「三善清行千百年祭」と記念講演を行う。その境内に碑を建てさせて頂き、また『三善清行の遺文集成』を出版する。

※「三善清行千百年祭」：延暦十八年（九一八）十二月七日、72歳で薨去した参議三善清行の千百年祭と記念講演を、清行の邸趾と伝えられる平安神宮に近い岡崎神社で行った。またこの境内に「三善清行卿邸趾」の石碑を寄進し、さらに現在判明する清行の全遺文を書き下し文にした『三善清行の遺文集成』（全文野木邦夫氏入力、A5判二二四頁）を京都の方丈堂出版から刊行した。

平成三十一年（令和元年）（二〇一九） 78歳

・四月一日、新元号「令和」が政令で公布され、また四月三十

日、平成の天皇陛下が「退位の礼正殿の儀」に臨まれる。さらに五月一日、令和の新天地陛下が「劍璽等承継の儀」を行われる。その際に、各々のテレビ特番解説も手伝う。

※「令和」改元：昭和五十四年（一九七九）制定の「元号法」に基づき、「元号は政令により定める」。そのため、政府（安倍晋三首相）は、早くから新元号文字の考案を碩学数名に委嘱し、各提出案の中から「令和」が選ばれた。

その出典は、「平成」までのような漢籍でなく、初めて国書の『万葉集』が用いられ、考案者は万葉学者の中西進博士（90歳）とみなされている。ただ、典拠の章句は大宰帥大伴旅人が梅花を賞でる宴で参会者たちの詠んだ和歌集に加えた漢文序から「令」と「和」の文字を採り組み合わせたもので、「涼々しく和かな」新時代への理想を表現したものと考えられる。

この元号は「皇位の継承があった場合に限り改める」と「元号法」に定められている。そこで、新元号は「平成」と同じく公布後直ちに施行すべきところ、今回は移行（書き換え）準備を考慮して、一ヶ月前の四月一日に公布し（平成の天皇が政令に署名）、五月一日から施行となった。しかし、新元号は新天地陛下が政令に署名されてから公布し即日に施行するのが当然であり、次の改元時には「平成」の

在り方に立ち戻ってほしいと考えている。

※「退位の礼正殿の儀」：平成二十九年（二〇一七）制定の特例法に基づいて「高齢」を理由とする「退位」（譲位）が可能となり、それを実施する際「即位の礼」に対応する「退位の礼」が四月三十日午後五時に宮殿の正殿で簡素に行われた。

この新例が将来の先例となるかもしれない。とすれば、もう少し盛大な形を考え、また退位（譲位）される天皇に一般国民も感謝できる場（パレードなど）を設けてほしい、と考えている。

※「劍璽等承継の儀」：戦後の「皇室典範」には「踐祚」（宝祚を踐む＝皇位に即く）の語がなく、「即位の礼を行う」として記されていない。そのため、前回と同じく今回も、旧「登極令」の「踐祚の儀」を「劍璽等承継の儀」と名づけ新天地陛下の国事行為とされた。

これは今なお「三種の神器」と称されるうちの「劍」と「璽」を「皇室経済法」に定める「皇位と共に伝わるべき由緒ある物」（神器ではない）として、公印の「天皇御璽」「大日本国璽」と共に、新天地陛下への承継儀式が行われた。

これは新憲法下で可能な在り方と評価されるが、その列席皇族が成年男性皇族に限られ、新皇后も未成年男子と女子も出られなかったのは、将来のために再考を要する。

※改元・讓位・踐祚の際にテレビの特番解説：一年程前からNHKと民放数社から御代替り関係の特別番組に出演を求められた。しかし、一人では対処しえないため、数年前から一緒に仕事をしてきた京都産業大准教授久禮且雄氏に協力を求め、先方で二人の日程を調整してもらった。

その結果、まず四月一日の改元特番は、午前中NHK、午後から夕方まで日本テレビ、ついで四月三十日の讓位の儀は、日本テレビなど三局、さらに五月一日の踐祚の儀は、午前中NHK、午後から夕方までと夜のニュースZEROは日本テレビ、翌二日夜のNHK「クローズアップ現代」などの解説を担当した。その合間に、国内外の新聞社・通信社などの電話取材にも可能な限り対応した。

尚、今年も九月二十二日、郷里で三十八年前から続けた「広木忠信を学ぶ会」を開いた。その際に、平成二十七年（二〇一五）十月十一日、岐阜県揖斐川町谷汲で「全国育樹祭」が行われた時、皇太子殿下がお立ち寄り賜った「揖斐川歴史民俗資料館」の前庭に「今上陛下御大礼記念」の石碑（御影石高さ2m余、地元の書家坪井進氏揮毫）を寄進させて頂いた。

・九月二十一日、明治神宮の参集殿において「近現代のユキ・スキゆかりサミット」を開催する。

※「ユキ・スキゆかりサミット」を開催：十一月の「令和大嘗祭」に先立ち、五月初め、「亀ト」により悠紀地方（東日本代表）は栃木県高根沢町、主基地方（西日本代表）は京都府南丹市が選ばれた。その来歴を再認識するため、明治／大正／昭和／平成四代の悠紀地方（山梨県の甲府市／愛知県の岡崎市／滋賀県の野洲市／秋田県の五城目町）と主基地方の（千葉県の鴨川市／香川県の綾川町／福岡県の福岡市／大分県の玖珠町）ゆかりの人々に集まって頂き、明治神宮の神宮会館でシンポジウムとアトラクション（お田植踊と創作バレエ）を開催することができた。

・十月初めに上皇職を介して、上皇后陛下の「英訳詩歌」所載の御高著と御言葉集を賜る。

※上皇后陛下の御高著：上皇后陛下（85歳）は、一月に御自身の御歌と永瀬清子さんなどの詩歌（合計三十五首）の見事な英詩朗読（CD）を収めた宮内庁侍従職監修『降りつむ』を毎日新聞出版から刊行された。また三月に十四年前（平成十七年）刊行された宮内庁侍従職『皇后陛下お言葉集 あゆみ』の「改訂増補版」を、同じ海竜社から出版された。その二冊を十月一日に上皇職を通じて御恵贈賜った。まことにありがたく無上の光栄と申すほかない。

〔追記〕令和三年十二月二十三日、上皇職からDVD-RO
M『上皇陛下―米寿をお迎えになつて／平成の歩み』を贈
つて頂いた。

・十月二十二日昼、「即位礼正殿の儀」が挙行される。また十
一月十四日夜半、「大嘗祭大嘗宮の儀」が斎行される。その
際にテレビ特番の解説を手伝う。

※「即位礼正殿の儀」と「大嘗祭大嘗宮の儀」：新天皇陛下
(59歳)の即位礼は十月二十二日正午ころ「正殿の儀」、午
後に「朝見の儀」、夜分にも「饗宴」が各々に執り行われた。
朝から雨天のため、正殿の前庭に並び立つ奉仕者らの晴
姿は見る事ができなかった。けれども、天皇・皇后両陛
下が高御座・御帳台に登られる正午ころ、急に雨が止み上
空に虹が懸り、「即位のおことば」が一段とおごそかに感
じられた。

ついで、前回(平成二年)より間隔を空けて十一月十四
日の夜半、皇居東御苑の大嘗宮において、「悠紀殿の儀」
と「主基殿の儀」が厳粛に執り行われた。これを今回はNHKも民放も特別番組で採り上げ、大嘗宮に入御し出御さ
れる御様子を鮮明に写し出したが、それを批判する声が出
どなかつたことは、世相の大きな変化といえよう。

この御即位と大嘗祭のテレビ特番には、四月・五月と対
応を逆にして、私が民放(主に日本テレビ)を優先させ、
久禮日雄氏がNHKと民放数社をカバーしてくれた。

また、京都産大の日本文化研究所やモラロジー研究所の
「皇室関係資料文庫」研究会と一緒に学んだ若い研究者数
名も、陰に陽に活躍できる機会に恵まれたことは、将来の
ために心強い。

・十一月二十三日、「日本学基金」から第七回「日本学賞」
を授与される。

※日本学基金の「日本学賞」：一般財団法人「日本学基金」
は、平成二十五年(二〇一三)十一月に文化勲章を受章さ
れた中西進博士を理事長として「日本学の各分野におけ
る、選考時点での最高の業績を顕彰」する目的で設立さ
れ、同年から毎年一回に「日本学賞」を授与してきた。

私はその存在自体を知らなかった。しかし、選考委員の
磯田道史国際日本文化研究センター准教授が、拙著『平安
朝儀式書成立史の研究』(昭和六十年)から編著『近代大
礼関係の基本史料集成』(平成三十年)まで御覧になった
らしく、「日本の伝統的な儀式制度に関する深甚な研究」
成果として推挙された由、説明を受けた。

その授賞式は、十一月二十三日、神田の学士会館において行われ、「令和」元号の考案者といわれる中西進理事長から、表彰状と過分な副賞を授与された。

尚、五年前（平成二十六年十一月）京都新聞社大賞の「教育記念賞」を授与されたが、長年の研究成果を「日本学」として評価されたことは、何より嬉しい。

令和二年（二〇二〇） 79歳

・年初から妻のリハビリ・サポーターを務めながら、未刊論考を集成して、デジタル出版の準備を始める。

※妻のリハビリ・サポーター：一昨年（平成三十一年）の四月四日「金婚式」を楽しみにしていた矢先、一月七日の朝食後、妻が左脳梗塞を発症して緊急入院、しかも加療中に大腸癌の大手術をしてストーマを付けることになった。

それでも四月・五月の改元・讓位・踐祚や十月・十一月の即位礼・大嘗祭などは、娘夫妻のサポートをえて何とか乗り切ることができた。

しかし、娘夫妻には各々仕事があり、孫姉妹の就職・進学とも重なる時期であったから、まもなく退院した妻のことは、できるだけ私自身がサポートすべきだと考え、今年

に入ってから昼も夜も一緒にいることにした。

そんな折に昨年の二月から新型コロナウイルスの感染が日本国内でも広がり始め、三月から否応なく在宅自粛するほかなくなった。

※未刊論考デジタル集成の計画：しかも、モラロジー研究所は昨年四月から客員教授で出勤フリーとなった。

そこで、毎日さまざまな家事をこなす合間に、学生時代から最近まで書いてきた論考で既刊拙著に未収の雑稿を寄せ集め、『未刊論考デジタル集成』として後世に残す計画を立てた。

もちろん、この編集計画は自分一人の手に負えないので、研究所の「伝統文化研究室」で一緒に仕事をしてきた麗澤大学准教授の橋本富太郎氏と京都産業大学准教授の久禮且雄氏を中心にして、数名の学友（清水潔皇學館大学名誉教授・野口剛帝京大学教授・吉野健一京都宮廷文化研究所研究員・堀井純二日本文化大学名誉教授・橋本秀雄汗青会幹事・川田敬一金沢工業大学教授・川北靖之京都産業大学名誉教授および野木邦夫日本学協会研究員）に協力を求め、研究助手の後藤真生氏（今春まで）に編集実務を担当してもらった。

そのおかげで、約一年かけて全十七冊のうち第一期三冊分を準備しえた。しかし半年ごとの配本を確実にするた

め、刊行開始を来年十二月とした。

・五月十日、随筆集『日本学ひろば88話』を出版する。

※『日本学ひろば88話』の出版：前述のごとく、私は平成二十五年（二〇一三）春からホームページ（tokoroisao.jp）「かんせいPLAZA」を開設し、「日本学広場」という欄に随想雑感を載せてきた。

すると、それを視たコミニケ出版『月刊朝礼』の編集者が、翌二十六年四月から同誌（A5判）で二ページの連載を依頼して来られた。しかも、それより五年後の今年三月で六〇回となる機会に、単行本化を勧められた。

そこで、同誌に未載の「かんせいPLAZA」拙稿と、歴史研究会の月刊『歴史研究』に吉成勇主幹より求められて、同三十年（二〇一六）四月から連載を始めた「巻頭随想」などを寄せ集め、全体に少し手を加えて作ったのが『日本学ひろば88話』（コミニケ出版、編集担当橋本直樹氏）である。

これは同二十四年（二〇一二）刊『古希随想』に続く数えの傘寿随想である。それに敢て八十八話を収めたのは、米寿を目指す願いによる。

その表紙デザインに、葛飾北斎の秀作「富嶽三十六景」

（天保五年（一八三四）75歳に版行）中もつとも著名な「神奈川沖浪裏」を用いた。これは木更津の沖合から小田原方面に富士山を望んだものとみられている。大浪に木船が採まれてもたじろがない人々の力強さと、晩年まで創作し続けた北斎の生きざまに勇気づけられている。

令和三年（二〇二一）80歳

・二月中旬、大垣北高関東同窓会の企画で、在校生のために様々な録画データを作り、母校に寄贈する。

※大垣北高関東同窓会：母校の岐阜県立大垣北高校には、関東支部同窓会がある。その年次総会・懇親会もコロナ禍により開けなくなった昨年、大石アケミ支部会長（一年先輩）に提案して、母校の在校生たちが視聴可能なビデオを贈ることになった。そのパイロット版を各界で活躍中の有志に作ってもらい、そのひとつとして私も「内村鑑三の『代表的日本人』に学ぶ」と題する拙話を録画した。

その背景は、文部科学省が令和元年末に公表した「GIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想」により、同三年度から全国の小・中学校で全生徒がパソコン・タブレットを活用できるようになるという。

しかも、それに先立って、同二年度から岐阜県教育委員会のスーパードグロバルハイスクールに選ばれた大垣北高校で構想実施に取り組み始めたことを知り、それに卒業生として僅かでも役立てばと思いついたからである。

・三月十一日、大垣北校の在校生に対して「北高で学びえたこと」と題してオンライン講話を行う。

※オンライン対話：昨年は昭和三十五年（一九六〇）三月卒業後六十年の節目にて、北高に若干の寄付をしたところ、増田俊彦校長のもとでいろいろ検討を重ねられ、生徒たちの自由なグループワークに役立つ多目的教室と地歴科教室を創られた。

しかも、その名称を生徒に公募して「commons」と決められ、その贈呈式と在校生への講話を企画された。それはコロナ禍のため、オンラインで行われることになったが、あえて東日本大震災満十年当日の三月十一日、ライブ実施され、生徒たちと有意義な質疑応答をすることもできた。

・三月二十一日、名古屋大学同窓会の依頼により、ウェビナー講演を行う。

※名古屋大学同窓会：母校の名古屋大学にも関東支部同窓会がある。その年次総会と懇親会が神田の学士会館で行われる。そこに一昨年初めて出た際、松尾清一総長から、来年度より名大と岐阜大学の連携による「東海国立大学機構」を発足させるので、名大を支援する基金の充実に協力してほしいとの御話を承った。

そこで、昨年四月、これまた名大入学六十年の節目にちなみ、若干の寄付をした。私は六十年前に北高から名大へ進みえたからこそ今の自分がある、という思いが強く、この機会に少しでも恩返しをしたいと考えたからである。

※ウェビナー（Web Seminar）講演会：昨春以来、社会的にはコロナ禍自粛のため、個人的には妻をサポートするため、ほとんどの講演依頼を断った。ただ、モラロジー研究所の定例会議と研究発表などはオンラインで参加が出来るようになった。

そこで、九月の揖斐川町民会館における「広木忠信に学ぶ会」も、十二月の岐阜県文化財保護協会記念講演「日本書紀から美濃古代史の謎を解く」も、主催者と相談してオンラインで実施された。

さらに、昨年秋から計画されていた名古屋大学同窓会と学士会館共催の講演会「宮廷文化の再発見」も、三月二十一日（稲川先生に学ぶ会）の翌日、ウェビナーで実施

され、共にライブで質疑応答まですることができた。

・四月二十一日、「皇室典範特例法の付帯決議に関する有識者会議」の「学識者ヒアリング」で管見を述べる。

※「付帯決議に関する有識者会議」：平成二十九年六月成立した「皇室典範特例法」の付帯決議に対応するため、ようやく四年近く経った今春、政府（菅義偉首相）が「有識者会議」を立ち上げられた（座長清家篤慶応義塾前塾長はじめ委員男女六名）。その第二回ヒアリングに招かれ、今谷明国際日本文化研究センター名誉教授・古川隆久日本大文学部教授・本郷恵子東京大学史料編纂所長の三氏と共に管見を公述した（その全容と参考資料は官邸ホームページに掲載）。

・六月初めから『禁秘抄』全訳注の執筆に取り組む。

※『禁秘抄』全訳注：今年は「承久の変」（一二二一年）から満八百年にあたる。そこで、この政変を起こし配流された後鳥羽上皇（41歳）と順徳上皇（25歳）の事績を調べ直し、前者について「後鳥羽上皇『大嘗祭神膳秘記』覚書」を四月までに仕上げ『藝林』の次号（十月発行）に寄稿した。

一方、後者については、譲位の時（25歳）までに纏められた『禁秘抄』の全訳注を思い立ち、六月から取り組んでいる。ただ、大まかな訳注は、すでに明治三十四年（一九〇一）初版・大正十四年（一九二五）補訂の関根正直博士（東大古典講習科出身、安政七年～昭和七年）著『禁秘抄講義』が出ている。これを参考にしながら古写本の翻刻に訳解と新注を加えた拙稿を野木邦夫氏に力してもらい、順次『藝林』に連載する。

・八月二十九日、泉涌寺の教学講習会における講話をオンラインで行う。

※泉涌寺の講話：「皇室の御寺」と称される泉涌寺の教学講習会（三日間）への出講は、昨年コロナ禍で延期されたが、渡辺恭秀教学部長の御尽力によりオンラインで実施された。その初日「光格天皇に学ぶ皇室の在り方」について話し、質疑応答もできた。

尚、仁和寺の教学講習会も、昨秋の計画が延期され、今年十二月十四日の予定となっている。その講話「仁和」改元と仁和寺の創建」は、コロナ禍が鎮まれば上洛する。

・九月二十日、今日から「幸せの種拾い日録」を書く。

※「幸せの種拾い日録」：昭和四十三年（一九六八）当時九月十五日の「敬老の日」に京子と出会ってから五十三年。その間の主な足跡を手帳メモなどに基づき「わが八十年の歩み」として纏めたが、今日からノート一頁分か半頁分に日々感じた「幸せの種」を拾って記すことにした。

尚、妻が毎日朝夕作る食事は、研究所顧問の伊東俊太郎博士も言われる通り「世界一うまい」。それを一昨年秋から描いている絵葉書と共に、毎日タブレットで写真に撮り、娘と孫に送信している。

・十月二十六日、b s T B S 19・30に出演して「眞子さまの結婚と皇室の在り方」につき鼎談する。

※三年前に内定会見のあった眞子内親王の婚約が、相手の金銭トラブルにより延期の上、婚儀も一時金もない異例の形で強行された。

それに関して今後の皇室の在り方を議論するというので、熟慮のすえ一年半ぶりに東京へ出た。名大後輩の河西秀哉准教授や作家の工藤美代子さんと、かなり立ち入った話し合いができた。

・十月二十九日、中津廣池千九郎研究講座「孝は百行の本」

（オンライン開催）で初日の特別講話①②を行うため、久しぶりに研究所へ出る。

※中津講座：早くから周到な準備を重ねてきた橋本富太郎氏と江島顕一氏や中津関係者の尽力により、三日間、頗る充実した内容となった。

・十二月一日、道徳科学研究所の月例会で「皇室経済法の成立史と問題点」について研究発表する。この際、個人蔵の近世天皇宸翰類を研究所へ寄贈する。

※研究発表：「皇室典範」と並ぶ「皇室経済法」の成立経緯と改善試案を発表した（『産大法学』に掲載予定）。

※宸翰類を寄贈：個人的に京都の古書店などから収集した後水尾天皇・明正女帝・後桜町女帝の宸翰と光格天皇の琵琶始之図を一括寄贈した（新春に展示予定）。

・十二月十二日、幸い元気に満80歳を迎える。本日付で『未刊論考デジタル集成』DVD-ROM版の第一期分（①②③セット）を京都の方丈堂出版（光本稔社長）から出し始めた。以後ほぼ半年ごとに第五期分まで出すことを予定している。

（令和三年（二〇二一）十二月二十三日稿）

